

『守護国家論』の一考察

宮 川 朋 子

一、はじめに ― 問題の所在 ―

日蓮聖人が三十八歳の時に述作された『守護国家論』は、聖人の初期の教学の重要な著述であることが指摘されている。すなわち、『守護国家論』に関連する研究論稿を、戦後昭和三十年以降から今日までを、管見ながら整理を試みると、二十二本の研究があり、つぎの四種に区分できる。①聖人の教義である五義の面からの研究、②聖人における本化教学の構築という面からの初期教学の研究、③聖人の浄土教批判の面からの研究、④『守護国家論』における引用経典の中から、とくに『涅槃経』引用面からの研究である。

これらの研究を日蓮聖人の法華経の行者としての不惜身命の生き方という面に着目し、概観するとき、④の研究が浮かび上がってくる。すなわち、久住謙是氏と高木

豊氏の研究である。

そこで、この二氏の研究を確認してみよう。

久住謙是氏の論稿「日蓮聖人の正法護持における涅槃経引用について」は、日蓮聖人の正法護持思想という視点から、聖人の引用された『涅槃経』について研究したものである。すなわち、日蓮聖人が末法における謗法の実事と、正法護持者への迫害の相関関係として遺文中に引用されている『涅槃経』の文は、以下の五文である。

(1) 「若善比丘、見壞法者、置不呵責、驅遣擧処、当知、是人仏法中怨、若能驅遣呵責擧処、是我弟子真声聞也」^⑤

(2) 「似像持律少誦誦經、貪嗜飲食長養其身」^⑥

(3) 「雖著袈裟猶如獵師、細視徐行如猫伺鼠」^⑦

(4) 「実非沙門現沙門像、邪見熾盛誹謗正法」^⑧

(5) 「於惡知識生畏懼心」^⑨

これらの経文を日蓮聖人が引用される意図は、聖人にとって弘教実践の法華経の行者の証しであるとの指摘がなされている。この引用文に注目してみると、(1)と(5)の文は『守護国家論』が初見である。¹⁰⁾

次に、高木豊氏の論稿「初期日蓮における『涅槃経』の受容——『守護国家論』をめぐる——」は、鎌倉新仏教における法華経・『涅槃経』受容という視点から初期の日蓮聖人における『涅槃経』受容を『守護国家論』を中心に研究されたものである。高木氏は日蓮聖人の『涅槃経』引用を著作と書状および『注法華経』において整理し考察されている。そして、日蓮聖人の『涅槃経』引用が弘通活動をはじめから晩年に至るまで生涯を通じて引用されていたことを確認され、聖人の五大部にも引用がみられることから基幹的著作を構築する支柱の一つに『涅槃経』があったとの指摘がなされている。

さらに、日蓮聖人の著作・書状の中で最も多く『涅槃経』の引用をされたのは『守護国家論』であると指摘され、『守護国家論』における『涅槃経』引用を十三の項目から考察されている。その中で、高木氏は科文ごとに引用の文脈を整理され、『守護国家論』の『涅槃経』引用で注目されるのは大文第四以下の引用であるとし、そ

の一つとして謗法と護法をあげている。そして、その謗法と護法において、『涅槃経』壽命品「若善比丘、見壞法者、置不呵責、驅遣舉處、当知、是人仏法中怨。若能驅遣呵責舉處、是我弟子真声聞也」の一文をあげ、「弘法者日蓮の生涯を貫いて、その支えとなった経文」との指摘をされている。すなわち、日蓮聖人の謗法に対する正法護持の姿勢からこの一文に着目されたのである。

以上、二氏の研究を確認すると、着目すべき点は、両者の指摘が前掲『涅槃経』壽命品の文に存することである。つまり、日蓮聖人の法華経の行者としての不惜身命の生き方に、末法の謗法と正法護持とが深く関わっていることが、この文の引用から知られる。

ところで、日蓮聖人の遺文中における前掲『涅槃経』壽命品の文である「仏法中怨」の引用を管見ながら確認すると、正元元年の『守護国家論』から弘安二年の『滝泉寺申状』までの十遺文¹²⁾があげられる。十遺文の中には、公的勘文である『立正安国論』にも引用がみられることである。¹³⁾その引用内容を確認すると、第五段において『立正安国論』を上奏する理由として「仏法中怨」の文をあげ、日蓮聖人の仏弟子としての自覚と眞の仏弟子としての態度や姿勢が表示されていることである。

このように、「仏法中怨」の引用は、聖人における謗法呵責と正法護持という側面と仏弟子としての生き方を支える文であることが確認できる。

そこで本稿においては、日蓮聖人の法華經の行者としての不惜身命の生き方の出発点として聖人初期の著述である『守護国家論』に注目したい。そして、『守護国家論』において初見である『涅槃經』壽命品の「仏法中怨」の引用文を通して日蓮聖人の仏弟子としての姿勢について確認したい。

では、『守護国家論』の「仏法中怨」の引用について確認する前に、まず『守護国家論』の構成について確認したいと思う。

二、『守護国家論』の構成

周知の通り『守護国家論』は初期の日蓮聖人の浄土教批判の代表的な著述である。本書の執筆理由は聖人自身がその序文において、次のように記されている。

予歎^ク此事^ヲ間造^ニ一卷書^ヲ顯^シ選^シ撰^シ集^シ謗^ヲ法^ヲ緣^ヲ起^ニ名^ヲ号^ス守護国家論^ト。願^ハ一切道俗止^ニ一時世事^ヲ種^ニ永劫善苗^ヲ。今以^ニ經論^ヲ直^ニ邪正^ヲ。信謗任^ニ仏説^ニ敢無^レ存^ニ自義^ヲ。⁽¹⁴⁾

すなわち、執筆の目的は法然の『選択集』の謗法を明らかにすることにあるというのである。日蓮聖人が法然の『選択集』の謗法を明らかにしようとしたきっかけは聖人の次の文に明らかのように、正嘉元年の大地震や相次ぐ天災地変である。

見^ル此^ニ經文^ヲ祈^ニ世間安穩^ヲ而^モ国起^ニ三災^ヲ可^シ知^ル惡法流布^{スル}故^{ナリト}。而^ル当^ニ世^ハ随^ハ分^ニ雖^モ祈^ニ国土安穩^ヲ去^ニ正嘉元年^ニ大地大動^ニ同^ニ二年大雨大風失^ニ苗實^ヲ。定^メ喪^ス国惡法有^ル此^ニ国^ニ歟^ト勘^ス也。⁽¹⁵⁾

日蓮聖人は相次ぐ天災地変を目の当たりにし、その原因は日本国に釈尊の正しい教えを否定する、惡法が広まっている謗法にあるとされ、その謗法を対治することによって日本国が平穩になると考えられたのである。

また、その方法は序文において「今以^ニ經論^ヲ直^ニ邪正^ヲ。」と記されているように、仏法の正邪を私見ではなく經論に基づくことを明らかにされている。ここに日蓮聖人の、文献主義的な立場が確認できる。⁽¹⁶⁾

ところで、『守護国家論』の構成は、聖人自ら以下のように科段を設けられている。

第一章 明^ス下^ニ於^ニ如来經教^ヲ一定^ニ中^ニ權實二教^ヲ上^ニ第一節 明^ス下^ニ出^ニ大部經次第^ヲ撰^ス中^ニ流類^ヲ上^ニ

第二節 明^ス諸經淺深^一

第三節 明^ス定^二大小乘^一

第四節 明^ス且可^二捨權就實^一

第二章 明^ス正像末興廢^一

第一節 明^ス爾前四十余年^一內諸經与^二淨土三部經^一

於^二末法^一久住^二不久住^一

第二節 明^ス法華・涅槃与^二淨土三部經並諸經^一久住

不久住^一

第三章 明^ス選集謗法緣起^一

第四章 明^ス出^二可^一對^二治謗法者^一証文^上

第一節 明^ス以^二弘法^一付^二中屬^一國王大臣並四衆^上

第二節 正明^ス謗法人處^二王地^一可^二對治^一証文^上

第五章 明^ス難^レ值^二善知識並真實法^一

第一節 明^ス難^レ受^二人身難^一值^二弘法^一

第二節 明^ス雖^レ受^二難^一受^二人身^一值^二難^一值^二弘法^上值^二惡

知識^一故墮^二三惡道^一

第三節 正明^ス為^二末代凡夫^一善知識^上

第六章 明^ス依^二法華涅槃^一行者用心^上

第一節 明^ス在家諸人以^レ護^二持^一正法^上可^レ離^二生死^一

依^レ持^二惡法^一墮^二三惡道^一

第二節 明^ス但唱^二法華經名字計^一可^レ離^二三惡道^一

第三節 明^ス涅槃經為^二法華經^一成^中流通^上

第七章 隨^レ問而答^一

では、その概容について各章ごとに確認してみよう。

第一章では、釈尊の説かれた教には方便經と真實經との区別があることを、天台大師の五時判を繼承され、法華最勝真實を証明する二乗作仏、久遠実成の説不説によって明かされる。そして、方便品、寿量品によって法華經だけが大乗であることを明かし、方便經を捨てて真實の經である法華經に帰依すべきことを譬喩品、宝塔品、勸発品、藥王品、神力品等の諸品及び『涅槃經』如來性品の十文をあげて述べられている。

第二章では、仏滅後の正法・像法・末法の三時における弘法の興廢について述べられ、末法に久住すべき法は法華經であることを爾前諸經や淨土三部經と比較され明かされる。そして、法華經は諸經が滅びても永く衆生を利益しつづけるとして、末法の時代に最も相應した教であることを法師品、宝塔品、勸持品、囑累品、藥王品等を法華經の久住を顯す証文としてあげている。

第三章では、『選集』が正法たる法華經を誹謗する邪惡の書であることを『選集』の五失をあげて具体的に指摘される。五失とは、第一には、一代聖教を聖道門・

難行道・雜行と浄土門・易行道・正行に分け、末代劣機の立場から法然は法華經や真言經なども難行や雜行に入られて仏の化導に背き、道俗を迷わした失。第二には、法然の引用した曇鸞、道綽、善導は爾前大乘についての教判であり、法華經を難行や雜行には入れてはいないのに法然が私的に法華經や真言經なども難行や雜行に入れてしまい、先師の本意に背いた失。第三には、法然自身の私的な意見により法華經や真言經等の行者を群賊等に譬える失。第四には、法華經を千中無一と評し、法華經を行ずる者に不安や疑惑を生じさせた失。第五には、自身だけではなく、他人にも勧めて真実經を捨てて方便經に入らせた失である。

第四章では、謗法の者を根絶しなければならない証明の經文として、はじめに『仁王經』をあげて、仏は仏法をまず国王に委嘱する、故に国を治めるものは仏法によって国を治めなければならないということを示される。次に、『大集經』によって王や臣下が正法を護り、邪法を正さなければ国内に三災が起ることを示され、続いて『涅槃經』をあげて、惡法を弘める僧をいましめ、正法を弘める僧を守護するものは無上道を覚えることができることを示されている。そして、惡法が弘まった国は護国

の諸天善神が国を捨てて去ってしまうとして『金光明經』等をあげ、謗法対治の任に当るべき者として国王を想定されている。

第五章では、善き師と真実の仏法とは値いがたいことを『涅槃經』をあげて示されている。はじめに、人間に生まれることは希であり、仏法に値うことも希であることを『涅槃經』迦葉品の「爪上の土」の文をあげて示され、また、希に人間に生まれ仏法に値うことができても、惡師に値えば三惡道に墮ちることを『仏藏經』や『涅槃經』の迦葉品、高貴徳王品等の文をあげて示される。そして、末代の真実の善師は法華經・『涅槃經』であることを明かされ、教法を善師とすることの証拠として『涅槃經』如来性品の「依法不依人」等をあげられている。

第六章では法華經・『涅槃經』を信仰する行者の心得として、在家の信者が正法を護持すれば生死の苦を離れ、惡法を信ずれば三惡道に墮ちることを『涅槃經』によって示される。続いて、仏弟子の中から仏法を破壊する者が現れることを『仁王經』をあげて示され、『選択集』がそれにあたるとして、世間一切の人々に対して正法を信じることをすすめられるのである。そして、法華經信仰者は題目を唱えることにより、地獄・餓鬼・畜生の三

惡道に墜ちることを免れることができ、さらに日本国は法華經や『涅槃經』と深い因縁を有する仏国であり、法華經・『涅槃經』の行者の住するこの娑婆世界こそが淨土であると説かれている。

第七章では、「問いに随って答う」として、法華經信仰者に対する諸宗の論難とそれへの対処の仕方が述べられている。

以上が全七章の概容である。

さて、再びここで日蓮聖人の法華經の行者としての不惜身命の生き方に注目すると、第四章の「明^ス出^{スコトラ}可^キ対^ス治^ス謗^ス法^ス者^ス証^ス文^ス」^上があげられる。すなわち、日蓮聖人は第四章の第二節において法然の謗法を明らかにする理由として、『涅槃經』壽命品の「仏法中怨」の經文をあげられている。

それでは、次にその引用内容について確認してみたいと思う。

三、『守護国家論』における「仏法中怨」の引用について

日蓮聖人は『守護国家論』の第四章の第二節において、法然の謗法を指摘することは、『梵網經』の比丘等の四

衆を誹謗する波羅夷罪になるのではないかという問いに對して、『涅槃經』迦葉品をあげて『梵網經』の四衆とは謗法者以外の四衆であると答えられている。これに續いて、仏の誠めとして『涅槃經』壽命品の「我涅槃後隨其方面有持戒比丘威儀具足護持正法見壞法者即能驅遣呵責徵治。当知是人得福無量不可称計。」と「若善比丘見壞法者置不呵責驅遣舉処当知是人仏法中怨。若能驅遣呵責舉処是我弟子真声聞也」を引用されている。

そして、日蓮聖人はこの仏の誠めを受けて、次のように述べられている。

予^ニ為^レ入^ニ仏^ノ弟子^一分^ニ造^ニ此^ハ書^ヲ頭^ニ謗^ニ法^ノ失^ヲ流^ニ布^ス世^ニ間^一。願^ク十方^ノ仏^ノ陀^ノ於^ニ此^ハ書^ヲ副^ニ力^ヲ令^メ下^ニ止^ニ大^ハ惡^ノ法^ヲ流^ス布^ス救^ヲ一切^ノ衆^ノ生^ヲ之^ヲ謗^ヲ法^ヲ上^ニ。

日蓮聖人は『守護国家論』を著し、源空らの謗法の罪を明らかにして世間に弘めるのは、自分は仏弟子の一人に数えられたいがためであると、仏弟子としての自身の願いを込められている。さらに、十方の仏陀諸尊に向かって、どうかこの書物の流布に力を加えられて、大惡法の流布するのを止めて、一切衆生の謗法罪を救っていただきたいという願いを込められている。

このことから、眞の仏弟子となることを強く願ひ生き

たのが日蓮聖人の仏弟子としての生き方であったことがわかるのである。

そして、日蓮聖人の仏弟子としての行動が『守護国家論』を著すことであり、この行動は翌年の『立正安国論』の奏進へとつながっていくのである。

すなわち、日蓮聖人にとって、教主釈尊の真意に背くこと、仏法の中の怨となることは仏弟子としてあってはならないことだったのである。故に、日蓮聖人の不退転の法華経信仰は「仏法中怨」の四字に支えられていたと考えられる。

以上のことから、『守護国家論』は、破邪としての『選択集』批判の面だけではなく、日蓮聖人の仏弟子としての生き方、法華経の行者としての生き方が顕された書であることが確認できる。そして、日蓮聖人の仏弟子としての生き方を支えた「仏法中怨」の文とは聖人の不惜身命の生き方と深い関わりがあると考えることができるのである。

なお、『守護国家論』以降の日蓮聖人遺文における『涅槃経』寿命品の「仏法中怨」の引用については、今後の研究課題としたい。¹⁹⁾

四、おわりに

以上、日蓮聖人の初期の教学の重要な著述である『守護国家論』に、聖人の法華経の行者としての不惜身命の生き方に着目し、聖人の仏弟子としての願いである「仏法中怨」の引用について確認した。そこで、理解したことをまとめてみると、以下の三点である。

まず第一には、先行研究である久住謙是氏と高木豊氏の論稿を確認することによって、「仏法中怨」の一文が、聖人の謗法呵責と正法護持の側面と仏弟子としての生き方を支える文であることが、改めて確認できたことである。

第二には、日蓮聖人の遺文中における「仏法中怨」の引用文は、正元元年の『守護国家論』から弘安二年の『滝泉寺申状』までの十遺文があげられ、生涯を通して引用されていることである。

第三には、『守護国家論』における「仏法中怨」の引用文の内容を尋ねてみると、日蓮聖人が真の仏弟子を目指されるという強い願いを持っていたことである。

以上のことから、『涅槃経』寿命品の「若善比丘、見壞法者、置不呵責駢遣举処、当知、是人仏法中怨、若能

駢遣呵責挙処、是我弟子真声聞也」の文における「是我弟子真声聞也」という仏の言葉は、日蓮聖人にとって仏弟子としての自身はどうあるべきかの指針であり、ここに説かれている「是我弟子真声聞」になりたいという日蓮聖人の強い思いがあったことが理解できる。そして、この強い思いが日蓮聖人の法華経弘通の源となり、不惜身命の生き方を支えていたと考えられるのである。

つまり、日蓮聖人にとって仏の誠めの言葉である「仏法中怨」は、聖人がその生涯を通して引用されていることから、常に聖人はその誠めを自身の心の内に置かれていたのではないかと考えられる。

註

(1) 茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』（昭和三十九年一月）、浅井円道稿「五義判の形成過程の考察―五義の発表まで―」（『大崎学報』第一一八号、昭和三十九年十月）、日野学誠稿「『守護国家論』における五義の説示」（『日蓮教学研究所紀要』第三十三号、平成十八年三月）。

(2) H・G・ラモント稿「日蓮思想における『守護国家論』とその役割」（『日蓮宗の諸問題』昭和五十年五月）、石指浩絃稿「日蓮聖人遺文における『守護国家論』の位置」（『日蓮教学研究所紀要』第九号、昭和五十七年三月）、関

戸堯海稿「『守護国家論』と『報恩抄』の関連」（『印度學佛教学研究』第三十九号（一）、平成二年十二月）、笹津海道稿「『守護国家論』に見られる日蓮聖人の浄土観」（『日蓮教学研究所紀要』第十八号、平成三年三月）。

(3) 池上潔稿「日蓮上人の初期における宗教思想の展開に就いて」（『立正史学』第十八号、昭和三十一年一月）、小松邦彰稿「日蓮聖人初期の教学について」（『印度學佛教学研究』第十五号、昭和四十二年三月）、小松邦彰稿「守護国家論の一考察」（『大崎学報』第一二五号、昭和四十六年七月）、田村晃祐稿「日蓮の『選択集』批判について―『守護国家論』を中心として―」（『東洋学研究』第十四号、昭和五十五年三月）、望月成浩稿「『守護国家論』の一考察―立正安国の前提条件―」（『仏教学論集』第十九号、平成二年三月）、渡邊寶陽稿「日蓮の初期教学の課題」（塚本啓祥教授還暦記念論文集刊行会編『知の邂逅―仏教と科学』平成五年三月）、浅井円道稿「守護国家論と摧邪輪」（『勝呂信静博士古稀記念論文集』平成八年二月）、岩田親静稿「『守護国家論』に関する一考察―『摧邪輪』との関連を中心として―」（『印度學佛教学研究』第五十号（一）、平成十三年十二月）。

(4) 久住謙是稿「日蓮聖人の正法護持における涅槃經引用について」（『印度學佛教学研究』第二十一号（二）、昭和四十八年三月）、高木豊稿「初期日蓮における『涅槃經』の受容―『守護国家論』をめぐる―」（和歌森太郎先生還

曆記念論文集編集委員会編『古代・中世の社会と民俗文化』昭和五十一年一月、『鎌倉仏教史研究』昭和五十七年七月再収）、関戸啓造稿「日蓮聖人の『涅槃經』引用の一考察——『一乗要決』との関連について——（『日蓮教学研究所紀要』第十号、昭和五十八年三月）、関戸堯海稿「日蓮聖人と涅槃經——一闡提成仏をめぐる『開目抄』と『一乗要決』の関連を中心——」（『印度學佛教学研究』第三十三号（一）、昭和五十九年十二月）、関戸堯海稿「日蓮聖人の涅槃經引用」（『大崎学報』第一四〇号、昭和六十年十二月）、関戸堯海稿「鎌倉新仏教における涅槃經受容の側面——源信と親鸞・日蓮——」（『印度學佛教学研究』第三十五号（一）、昭和六十一年十二月）、関戸堯海稿「『一乗要決』と『守護国家論』の関連」（『印度學佛教学研究』第四十四号、平成七年十二月）。

- (5) 『涅槃經』三卷壽命品第一の三『大正新脩大藏經』（以下『正藏』）十二卷三八一頁 a
- (6) 『涅槃經』四卷如來性品第四の一『正藏』十二卷三八六頁 b
- (7) 『涅槃經』四卷如來性品第四の一『正藏』十二卷三八六頁 b
- (8) 『涅槃經』四卷如來性品第四の一『正藏』十二卷三八六頁 b
- (9) 『涅槃經』二十二卷光明遍照高貴德王菩薩品第十の二『正藏』十二卷四九七頁 c

(10) 真蹟完存・曾存・断片現存・断簡現存・直弟写本現存の遺文に限定。

(11) 註(5)に同じ。

(12) 正元二年『災難興起由来』、正元二年『災難対治鈔』、文応元年『立正安国論』、文永九年『開目抄』、文永九年『真言諸宗違目』、文永十二年『大田殿許御書』、建治三年『頼基陳状』、建治・弘安の交『立正安国論（広本）』、弘安二年『滝泉寺申状』である。

(13) 小松邦彰氏の論稿「立正安国論小考——日蓮聖人における政治と宗教——」（『日蓮教学の諸問題』昭和四十九年十二月）において『立正安国論』の「仏法中怨」の引用について触れられている。

(14) 『昭和定本』九〇頁

(15) 『昭和定本』一一六頁

(16) 日蓮聖人は『守護国家論』において經典を仏の「遺言」、「金言」等と表現され、「法華經・釈迦牟尼仏也」（『昭和定本』一二三頁）と法と仏は一体であると述べられている。

(17) 戸頃重基・高木豊編『日本思想大系14日蓮』（岩波書店、一九七〇年）、日蓮宗事典刊行委員会『日蓮宗事典』（東京堂出版、一九八一年）、渡邊寶陽・小松邦彰編『日蓮聖人全集』第一卷宗義1（春秋社、一九九二年）等、参照。

(18) 『昭和定本』一一九頁

(19) 日蓮聖人遺文中における『涅槃經』壽命品の「仏法中怨」の引用については、鈴木一成氏が昭和十八年から昭和十九

年に「身延入山の理由とその表現―日蓮聖人伝論考―」
『法華』第三十卷十二号、第三十一卷三号、第三十一卷四号、第三十一卷六号」という四回にわたる論稿において、聖人の身延入山理由の一つとして聖人の与同罪の面から考察されている。また、原愼定氏が「日蓮聖人における「受難」の意義」(『日蓮教学研究所紀要』第二十五号、平成十年三月)という論稿において、聖人の受難克服の面から考察されている。